五代目桂文枝 いちもん新聞

発　行
いちもん新聞編集部
〒630-0246 生駒市西松ヶ丘8-8
「いこまのたぬき小屋」内
(有)文福らくごプロモーション
TEL･FAX　0743-73-6663
桂　　文 福
ホームページ　文福部屋
ユーチューブ「たぬき小屋から福もろ亭」

令和8年5月　第132号

今年の夏も五代目文枝一門の噺で笑中御見舞い

祈
世界平和
災害復興
健康長寿
笑売繁昌

五代目文枝

玉出はんなり亭のちょうちん

文珍

四代小文枝

六代文枝

彦八まつりチラシ

阿武松部屋千秋楽パーティー

繁昌亭

若者頭の福ノ里さんと

あやしい？お客

喜楽館

○繁昌亭20周年にむけて

繁昌亭が今年9月15日、丸20周年を迎える。その前には繁昌亭の改修工事なども予定している。

また来年は、上方落語協会創立70周年の節目でもあり、その時のカジ取り役としての会長選挙（一期二年）が4月下旬におこなわれ、この新聞がでる頃には新体制が出来ている。

○第33回彦八まつり

上方落語発祥の地、元禄年間に「辻噺」として活躍された米澤彦八の碑がある天王寺区生玉の生國魂神社（いくたまさん）で5月16日、17日と2日間開催。「ファン感謝デー」「上方落語家の文化祭」としてのこの祭り。今回の実行委員長は月亭方正師、彼の人脈で吉本の大看板 間寛平さんやスッチーさんらがゲストとして花をそえる。更に一年間使用した扇子を彦八師の碑にお供えする「扇納祭」も宮司さんらにより、おごそかに行なわれる、又、奉納落語会や野外ステージもにぎやかに。

各一門の屋台も出るがコロナの頃より、食べもののお店がきびしくなり、出店も抽せんに…。我が五代目一門の「文枝茶屋」の名物焼きうどんは毎年、2日間で千食ほど出る人気。しかし残念ながら今回、抽せんではずれ。店長の枝女太、坊枝もがっくり…。しかし、一門のたまり場として気をとりなおし今年は昔なつかしい駄菓子屋さんとして出店。皆さん心からおまちしてまっせー

○六代文枝の茶屋町ホテル

かつては「新婚さんいらっしゃい」など50年以上続くテレビでギネスにのるなどメディア王として活躍した三枝時代。今はマスコミより創作落語をどんどん作ったり、若手にけいこをつけたりと落語の高座に重きをおく六代文枝だが、若い頃ラジオ「ヤングタウン」テレビ「ヤングオーオー」など毎日放送とのご縁が深く今も月に一回「文枝の茶屋町ホテル」の番組をもち何と25年、四半世紀も続く人気番組でメディアでも文枝節は健在だ。

○小文枝記念プロジェクト!! ゴールへ

2年前に芸歴55周年を機に「きん枝改め四代小文枝芸歴55周年記念大作戦YOUNG GOGO!! 落語家人生山あり谷あり谷あり」として全国55ケ所大小さまざまな落語会を開き経費以外すべて被災地に寄附するプロジェクト。4月にゴールを迎え能登地方で寄席を催し寄附を届ける感動のフィナーレを迎える。

○文珍第77回日本放送協会放送文化賞受賞

NHKの放送開始25周年にあたる1949年に創設されNHKの放送に貢献があった方々に贈られる賞で今回は歌手の松任谷由美さんや俳優の里見浩太郎さんらと共に文珍が選ばれた。「日本の話芸」「演芸図鑑」「クイズ日本人の質問」などでの活躍が評価されたのだ。

まめだの無口なたぬき

先日ABCホールでのZARDのフィルムコンサートに行ってきました。4日間、各3回の上映がされ各回満員だったようです。少し早めに着いたが既に長打の列、電子チケットで戸惑いましたがなんとか入場でき席は2階の一番前の席で観やすい、いい席でした。昔のコンサートの模様や楽屋風景、リハーサルの映像等が流れ興奮しました。「負けないで」や「揺れる想い」だけでなく他にもいい曲がいっぱいあり、涙する曲もありました。帰ってきた今でも、なつかしい映像、いい曲がザーット心に残ります。

文也の分野

例えばある長屋に虎助という頭のおかしいおっさんがいて近所の家に突然踏み込んで「お前気に入らんねん家に火ぃつけたろか!!」とガソリン撒くわ、舎弟やった奴の家に忍び込んでボコボコにして簀巻きにして築港に沈めて金目のもん盗んで嫁はん手込めにして止めに入った家主やご隠居に「いてもたろか!!」と絡むわ、自分の取り巻きの見栄張りの娘婿とアホの息子とネジが抜けてる舎弟を引き連れて道歩いては片っ端からメンチ切ったやろと殴りかかるわ、前から来た奴の足踏んで、痛い!! 足怪我した!! 治療代よこせ!! と騒ぎ出すわ、誰やねんこんな奴この長屋に連れて来たんは!! と皆が頭抱えていっその事こいつ殺してまえと息巻いてる……てなとこですか、いや世界の厄介もん虎助、いやトランプの振る舞いですわ。

突然イランに攻撃しかけたせいで石油は止まるわ円は暴落するわ、おかげで世界は分断され、中東は大混乱。石油関連のみならず全ての物品が爆上がりするわ、細々と生きてきた零細落語家の老後は崩壊したわ。ほんま何してくれるねん。これなら酔うて（いや酔わんでも）見境なくどっピュん話を仕掛けてくる○福師の方がよっぽどマシやわ。

その影響は落語界にも危機をもたらした。物価高と将来不安でお客さんは落語見て笑てる場合やなく、噺家は定年なく仕事ができると言うが仕事そのものが消えた。もはや我々の命運はアメリカ国民の良識に託された。ああ次の大統領選で落選してぇ!!

白鹿のはくはくしかじか

私は、揉めるつもりはないのに嫁としょうもない事でよく揉める。ある日、嫁が「猫飼いたい!」と言うので正直に「犬がええ!」と言った。「いや猫!」「いや犬!」「猫!」「犬!」…揉める。もうええかと「ほな猫飼うか?」と言うと「でも私犬猫アレルギーやねん」ほなどっちも飼われへんやないか! なんや今のやり取り! またある日、「今日、子供に似合う服見つけてんけど、今度一緒に見てくれへん?」見つけた時に買えばええのに、とは言わず、後日一緒に見に行く。「これやねんけど、色が赤と緑あって、絶対赤の方似合うと思うねん。どう?」正直に「ええと思うで!」と言った。「でも緑の方が好きやろ?」「いや俺も赤の方が似合うと思うで!」「なんで嘘つくんよ! 絶対緑の方がいいと思ってるやん!」なんで? 本音をお伝えしております。嫁は、揉めるつもりでいる。

文喬のぶんきょうチック

民放テレビ各局、早朝こぞって「今日の星座占い」というのを放送している。「しし座のあなたは絶好調。何事にも積極的に行動すればうまくいく。しかし、焦りは禁物、慎重に。ラッキーカラーはブルー。青いものを身に着けると良いことが云々」。全く信じてないのに青いセーターを着て外出する自分がいる。

そういえば、噺家になって三年目くらいに或る健康ランドへ営業で行った。（闇営業ちゃうで吉本からの依頼やで）風呂から上がって休憩する大広間で落語をする仕事。お客さんは皆寝ながら聴いている? やりにくいことこの上ない。午後一時、三時、五時の三回。ロビーでは占い師がこれも営業で来ていた。落語の合間に暇やから一緒に行った落語家とその占い師に見てもらった。生年月日と名前を云って占うやつ。今でも覚えている。「あなたは大器晩成型

です。晩年、運気が上がって成功します。ただ早死やね」と。このことを自分のように舞台で云ってる落語家がいるが、あれはその当時一緒におった落語家仲間が広めたんやと思う。最近、手相占いの方に手相を観てもらった。「晩年、運気が向上してすごくいいことがあります。ただ、健康に留意しないと早死にしますよ。七十二歳に大病するという卦が出ています」。もうとうに七十二歳過ぎてるで。ちょっとでも若く見られたのは嬉しいけど、五十年前とおんなじようなことを云うてたな。大器晩成はもう終わってしもたけど、早死には気になるわ。近々、大腸憩室炎で手術をせなあかんねんけど、無事生還できるやろか。

枝女太の「和」のこころ

言葉のはなし　その五。

今から三〇年以上前、言葉狩り全盛の時代に「百姓」が放送禁止用語だといわれたことがありました。「農家の方」と言えと。堅苦しく聞こえるならせめて「お百姓さん」と言えと。百姓と言うときつく聞こえる。職業差別と言われる可能性があるということです。

たしかに百姓と言うときつく聞こえるのは事実です。私自身、百姓と聞いて連想するのは貧乏とかみじめとか、そんな負のイメージです（お百姓をされている方、ごめんなさい）。ところが同じことでも農家の方と言うとお金持ちとか大きな家というイメージになるのです。言葉から受ける印象というものはこれだけ違うんだよね、とか言ってる場合ではないのです。問題はなぜ百姓という言葉がそんな悪い印象の言葉になってしまったのかということ。

そもそも百姓というのは多くの人々、つまり一般の国民のことを指す言葉で、農業従事者を指す言葉になったのは中世以降のことです。それが悪い言葉のイメージがついたのは実は教育の方法が悪かったから…というお話はまた次号で。

文太のむかし噺
ひ・貧乏花見

（その三）

桜の宮へ花見に来た
長屋の連中。
酒はお茶で
サワラの子はおから…。
「ハジカミいうて食べたら
ただの割り箸の
ハジをかじるだけやし、
イタワサいうたら
板にワサビが
塗ってあんのを
ねぶるだけでっしゃろ」

◇

長屋の連中、
辛抱たまらんように
なりよって
「向こうの桜の下で
どっかの旦那、
芸者・舞妓・
太鼓持ちをあげて
ごっつぉうで
酒飲んどるがな。
暴れ込んであれ皆、
とってきたろか」
「そうしよう、
そうしよう」
ご馳走と酒を
とってきよった。
お重に入ってた
卵の巻焼をかじると
こうこ。
薦かぶりの酒を飲んだら
「お茶け」やった。

（了）

文昇問題　その一

4月から自転車の交通反則制度、いわゆる「青切符」が始まっている。自分が自転車に乗っている時を棚に上げて言わせていただくと、マナーの悪い人が多い。確認なしに信号無視する。歩道を並走し、歩行者とすれ違う時でも頑なに一列にならない。私は違反を取り締まる側でも、聖人君子でもないので、優先者の邪魔をしなければ赤信号で渡ろうが、誰も居ないなら道幅ギリギリまで横に並んで走ってもいいと思う。

それに先立ち、我が町会では、警察の方に講習をしてもらった。非常にわかりやすく解説してもらった。このお巡りさんは元々刑事課で、今は交通課だそうだ。以前は犯人を捕まえたら感謝されたが、今は違反者を捕まえると、恨まれるようになった、と。恨まれたくないので、自転車で違反しないでほしい。生まれ変わったら、警察官にはなりたくない、とも言っていた。

自転車操業の噺家の戯言。

「あやめの女王様とお呼び」

今年も恒例の花詩歌タカラヅカのシーズンがやってまいりまして、只今猛練習中！今年は十五周年なので、落語の前に宝塚の新入生のような黒紋付、緑袴での口上をやる事にしました。その背景にはいつも創始者・小林一三先生の「清く正しく美しく」とお書きになられた扇面の額が上がるので、私たちも隠れ花タカメンバーで達筆の米團治師に「清く正しくおもしろく」と書いていただき掲げます。

今年は本当の新入生も迎えました。我が一門、枝女太師門下の結女花ちゃん。ミュージカルやってたという噂を聞き、まだ修業中ながらお借りする事にしたのですが、立派にソプラノで歌えるし踊れるのです！そしてお客様まで呼んでくれます。まず師匠の奥様がチケットご購入下さり、師匠も観に来られるとの事。しかも私に伝言が来ました。「初日は法事やから遅れるけど、二日目は早よ行けるから」。いやいや師匠二日も来んでも…。案外ハマって来年は結女花の後輩として出てるかも⁉

坊枝の新婚日記

妻に「〇月〇日に落語会をやるから」と言うと「アカン、その日の近くに多福（自称 演劇人の次女）の舞台があんねん、お客さんに両方は申し訳ないから、やめといて」と言われた。「多福の芝居と俺の落語会、どっちが申し訳ないんやろう」と思った。

また妻は多福が出る舞台やイベントの情報を私の知り合いや同業の先輩後輩に平気でラインなどで知らせるので「同業者に身内の出演の知らせなんかすんな、カッコの悪い！」と言うと携帯の着信音が鳴ったのでラインを開けると、ある先輩から「あしたの私のユーチューブを見てけ～」とあった。

楽珍の”警備員“日記

「あんた…警察から電話やで…。」
「え？…何で？…。」
「知らんよ…早う出て…。」
不安気な顔の嫁さんからスマホを受け取ると
「あ～中山さん？あなた今日の夕方、小学校5年生の女の子と何かありました？　はっきり言うて〝チカンの件〟ですが…。」
「え～‼チカン⁉そんな事してませんよ‼」
「皆さん最初はそう言うんですよ。『そんな事してない‼』って。」
「イヤ、ほんまに私じゃないですよ！。」（目の前で嫁さんが呆然としている）
「え～中山さんじゃない？困ったなぁ…イヤあのね、その5年生の女の子が、チカンにあいそうになった時に、体を張って、犯人から守ってくれた警備員さんがいて『僕が絶対君を守るから安心してね‼』と言ってくれた言葉がすごくうれしくてご両親がお礼をしたいそうでして、私どもがその警備員さんを探しているんですが…中山さんじゃないんですね？。」
「いえ私です。それは私です。」（吉本新喜劇ならコケる所だろう㊝）

結局、警備員としては、当然の事をしたまでなのでご両親からのお礼は低調にお断りする事にしました。しかし―

明くる日、朝礼で私は警備本部より表彰状と、百万円は入りそうな豪華な祝儀袋をもらう事になった。朝礼後、仲間の警備員が、〝中山さん、アレなんぼ入っとった?〟〝早う開けて、見ちぃてくれ〜〟。

〝1万円か?〟〝3万円か?〟

〝いやぁ〜5万円は入っとるぞ〜。〟

皆が勝手な事をワイワイ言いながら盛り上る中、私が祝儀袋を開けると―

中から五百円のクオカードが1枚出て来たとたん、大爆笑が起きた。本部もセコいのう〜…私も笑いながら、〝これで良かった〟と思った。

「枝曾丸のつれもていこら」

先日、繁昌亭主催で僕を案内役にした「防災落語会」を開催。もちろん、僕の防災落語もお聴き頂いたのですが、メインは、初めての試みである。

公演中に火災が発生したという設定で演者もお客様も天満宮に避難するという訓練です。当日は、消防署職員さんをゲストに座談会の最中に警報機が鳴り、スタッフが誘導して屋外へ。

事前にお客様にも伝えていたとはいえ、突然鳴ると「どうしよう!」という気持ちで身体が固まるもの。口にハンカチを押さえて身をかがめながら退去。思ったより客席からはスムーズに天満宮まで。問題は、私たち芸人です。舞台から楽屋口へと逃げるのですが、タイミングなど不安なところが見つかり良い経験になりました。照明設備や下座。通路の狭さ。「もし地震が発生したら?」と思うと考えるとゾッとしますわ。周辺の地域の方が世代を超えて集まってくれた初企画。安心して楽しんで貰える寄席小屋に今後も勤めたいと思います。会が終わってからも、演者とお客様が共に「もしものそなえ」や対策を語り合えたのも、普段の寄席ではない光景でした。お客様との距離が近くなったようにも思えた意義ある朝席でした。

ぽんぽ娘ピーのポンポコナー

私事だが14年間、お世話になっていた吉本興業を離れることになった。吉本に所属していたおかげでバラエティ番組など色々な経験をさせてもらえた。ただ今年嘶家として20周年（その前に浅草芸人として8年間）なので自分らしく活動してみたいと吉本を離れる決意をしたが、いざ離れてみると吉本という大看板がなくなり自分ひとりで活動できるのか?漠然とした不安に襲われてしまい本当に情けない。

その点うちの師匠は素晴らしい。吉本で活躍していた若手時代から、吉本という大看板を隠し、初代闇営業として活動したり、反社系の地方の芸能社とも堂々とわたりあい、六代文枝襲名の手伝いを機に吉本に復帰したあとも地方に行く時は、あえて吉本の看板を出さずに、文福らくごプロモーションという吉本興業の下位互換の事務所に自分の身を落とし、あえて芸一本で勝負している。本当に素晴らしい師匠だ。ただ修行の足りない私は、師匠のようにはなれないし、なりたくもない。

文福のおいやんストーリー

私事ですが、この春で「らくご笑売」55年目に入りました。そして入門日の4月1日に、大きな決断をしました。「そんなたいそうな」73才の誕生日3月31日付で吉本興業をやめました。しかも2回目の退所!!思えば昭和46年秋に旧のなんば花月の楽屋口で三代目小文枝（後の五代目文枝）に「おいやん!!弟子にしてけえ!!わえ、おまんのファンやいしょ、おもしゃいなー落語は。弟子にしてくれな、あかなしてよ!!」と紀州の標準語で入門志願したら師匠は一言「いね!!」「イイネやないよ。帰れという意味」

その頃、大日本印刷製本工の私は、金のたまごで会社側が来年の新入社員とバトンタッチするまでやめたらあかん（そんな時代あったんですね〜）。晴れて47年の春に入門を許され、あこがれの「なんば」「うめだ」「京都」の花月劇場で修行させてもらい、やがて高座に出してもらいテレビ、ラジオのレギュラーも入りスターになりかけ、いやなりそこねた頃はバブル全盛期。各地からお声がかかり今やから言いますが、反社系の地方の芸能社からも、および頂きました。いわゆる闇営業トホホー。その頃なんば花月は千日前、うめだは曽根崎、京都は新京極と花月が満員になっても土地の値にあわんと、この三館閉めてビルを建て、テナントを入れました。かわりに現在のNGK（なんばグランド花月）が出来ましたが、それまでは「三枝」「仁鶴」「やすしきよし」新喜劇の「花紀京」「平参平」らを見に来たお客様は「へえ〜こんなおもろい漫談のおっさんいたんか」「この曲芸は名人やな〜」「やっぱり生はええなぁ〜」

ところがそんな名人、師匠方は皆おはらい箱、NGKはテレビの人気者ばかりで新しい発見はなし。私も一応、NGKに出れる人気者のはしくれでしたが「こんな吉本おもろない!!」と小さな石を投じましたら大きな岩がかえって来てサンスポの芸能面に「文福クビ」「闇のプロモーター」レギュラー番組、皆なくなりました。（今はさすがに、労基法によりこんなことダメ）今から40年程前のこと「紀の川芸能」を立ちあげましたが、どうもうさんくさいイメージがあり「（有）文福らくごプロモーション」として船出し、弟子達や賛同してくれた芸人さん達と各地で「ふるさと寄席文福一座」で活動。一生、吉本にもどる気はなかったのですが、14年前一門の総領三枝が「六代文枝」の大名跡を襲名となり「吉本興業百周年記念事業」に協力する形で形式的に吉本に。その時、「ぽんぽ娘」らも吉本所属になりました。そして毎年、面談があり、契約書にサインして来ましたが、今やNGKの出番もまったく無く大相撲関連のラジオ等を希望してもセールスもなく、さらに万博やカジノなど公共事業等、私は反対派なのでサインをせずに、退所しました。

今の時代コンプラにきびしく、行政の仕事などで芸人の不祥事にピリピリする吉本。今年から、どんな小さな会でもちくいち、吉本に報告せよとのこと。そんな事、してられるかえ!!しかしかつてメディアに出してもらったおかげで今も細々とその余韻で各地にまねかれるのは吉本のおかげと感謝しながら、これからもヨーシモットがんばりまっせー

編集後記

いつも当新聞のご愛読ありがとうございます。この号は八月末まで各地でお目通り致します。

さて浪花に春をよんだ大相撲三月場所では、霧島関が優勝して見事、大関復帰を果たしました。陸奥部屋から音羽山部屋と環境が変わる中、ケガをのり越え、こつこつ稽古した苦労が実りました。多くの後援者、ファン、ご家族の支えも大きいですが、ずっと影ながら支えた一人の裏方さんが居ました。

日本相撲協会の若者頭の福ノ里さん（元十両）このフクちゃんと私は45年の友人、今をときめく、若隆景関らの（大波三兄弟）のお父さん、元幕下若信夫さんとの修行仲間、彼はこの五月で65才の定年。「師匠!!最後の大阪で、霧島が大きな仕事してくれ、いい夢見させてもらいました…」と泣き笑いのフクちゃん笑う門には福ノ里。我々も高座の時のおはやしさん、お茶子さん、舞台の進行さん、多くの「裏方」さんにあらためて感謝をしてがんばろうと思いました。

（文福）